

講演会とシンポジウム

夏目漱石と青春

ワガハイモ シツテイル 漱石ノ
セイシュン



Program

第1部

平成26年度新宿区夏目漱石コンクール
優秀作品表彰式

第2部

講演「漱石と私」

講師：夏川草介（作家・医師）

第3部

シンポジウム

「もっと若者に
漱石を！」

パネリスト：

夏川草介

森まゆみ（作家・地域文化研究者）

香日ゆら（漫画家）

吉住健一（新宿区長）

コーディネーター：

牧村健一郎（朝日新聞記者）



▶日時

平成26年12月14日 日 14:00開演（13:15開場）

▶会場

早稲田大学大隈記念講堂 大講堂

主催  新宿区
SHINJUKU CITY

共催 朝日新聞社 早稲田大学

▶新宿区公式 HP <http://www.city.shinjuku.lg.jp/>



「夏目漱石と青春」開催にあたって



夏目漱石記念施設整備プロジェクトVol.1.3～講演会とシンポジウム「漱石と青春」～にご来場いただき、誠にありがとうございます。

新宿区では、漱石生誕150周年となる平成29年2月の開館に向けて、漱石終焉の地である新宿区早稲田南町7番地に（仮称）「漱石山房」記念館の整備を進めています。

記念館の整備にあたっては、多くの方々のご参画をいただきたいと考え、「夏目漱石記念施設整備基金」を設置し、昨年7月から寄付の受付を開始いたしました。ご厚志をお寄せいただきました皆さまには心より御礼申し上げます。開館に向けて、引き続き皆さまの温かいご支援・ご協力をお願い申し上げます。

本日の第1部では今年度初めて実施した「新宿区夏目漱石コンクール」で優秀作品に選ばれた皆さんに表彰状を授与します。そして第2部では、漱石ファンとしても知られる夏川草介さんに夏目漱石の魅力や、人の命の尊さについてご講演いただきます。第3部では、パネリストの方々から、若い世代にも伝えたい漱石文学の魅力を伺います。

最後までゆっくりお楽しみいただき、漱石の世界や記念館整備に思いを馳せていただければ幸いです。

新宿区長 吉住 健一

第1部

平成26年度 新宿区夏目漱石コンクール 優秀作品表彰式

「猫になって描いてみよう! ～わがはいはネコである～」(小学生対象)

「わたしの漱石、わたしの一行」(中高生対象)

全国から応募された作品から優秀作品を紹介し表彰します。

講評 半藤 一利 (作家)

昭和5年(1930)東京都生まれ。東京大学文学部卒。文藝春秋に入社し、「週刊文春」「文藝春秋」編集長、専務取締役、顧問などを歴任。『日本のいちばん長い日』『日露戦争史』『幕末史』など著書多数。『漱石先生ぞな、もし』で第12回新田次郎文学賞、『ノモンハンの夏』で第7回山本七平賞、『昭和史』で毎日出版文化賞特別賞を受賞。



第2部

講演 「漱石と私」

講師 夏川 草介 (作家・医師)



ベストセラー小説『神様のカルテ』の著者・夏川草介さんに、大好きな作家・夏目漱石の魅力を語っていただきます。また地域医療の最前線に従事する医師として、漱石の時代も現代も等しい、人の命の尊さについて考えます。

Profile

昭和53年(1978)大阪府生まれ。信州大学医学部卒。医師として長野県内の病院に勤務するかたわら、平成21年に小説『神様のカルテ』で作家デビュー。同作は、第10回小学館文庫小説賞、第7回本屋大賞(第2位)を受賞し、ベストセラーになった。また続編を含め2度にわたり映画化された。ペンネームの夏川の夏は夏目から、草介の草は「草枕」からとった。

シンポジウム 「もっと若者に漱石を！」

もっと若い世代に漱石を読んでもらいたい。第2部の講師・夏川草介さんに加え、人気の下町エリア「谷根千(谷中・根津・千駄木)」研究家でもある作家の森まゆみさんや、漱石と門下生を四コマ漫画で描く漫画家の香日ゆらさんにご意見を伺います。

パネリスト

◆夏川 草介

◆森 まゆみ (作家・地域文化研究者)

昭和29年(1954)東京都文京区生まれ。早稲田大学政経学部卒。出版社編集者を経て、昭和59年に地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を創刊し、谷根千ブームのきっかけを作った。著書に『鷗外の坂』『「青鞥」の冒険一女が集まって雑誌をつくるということ』など。



◆香日 ゆら (漫画家)

昭和52年(1977)青森県生まれ。趣味で漱石に関する漫画を描いていたところ、出版社の目にとまり連載化。著書に漱石と門下生を描いた漫画『先生と僕～夏目漱石を囲む人々～』(全4巻)や『漱石とはずがたり』(全2巻)がある。



◆吉住 健一 (新宿区長)

昭和47年(1972)東京都新宿区生まれ。日本大学法学部卒。平成15年から新宿区議会議員2期、平成21年から東京都議会議員2期務める。平成26年(2014)11月新宿区長に就任。



コーディネーター

◆牧村 健一郎 (朝日新聞記者)

昭和26年(1951)神奈川県生まれ。早稲田大学政経学部卒。朝日新聞社入社後、校閲部、アエラ編集部、学芸部を経て、現在は文化くらし報道部be編集部。著書に『新聞記者夏目漱石』『旅する漱石先生』など。



4コママンガ

夏目先生 実は…

香日ゆら

©Yura Kouhi 2014



漱石と若き門下生たち

夏目漱石と聞いて、どのような人物を思い浮かべるでしょうか。よく知られている、口髭をたくわえた顔で、頰杖をついている姿は威厳があつてどこか近づきがたく見えるかも知れません。しかし、実際の漱石は多くの若者たちから慕われる存在でした。

その証拠に漱石の自宅には教え子やファンがひっきりなしに訪れ、事もままならない状況に困った漱石はやがて木曜日を面会日と定め、これは後に「木曜会」と呼ばれるようになりました。「木曜会」は会を重ねるごとに賑やかになっていき、終の棲家となった「漱石山房」の時代には狭い部屋が人でごった返していたそうです。最晩年に顔を出すようになった芥川龍之介はそのような状況を評して、漱石の体からは何時でも「人格的なマグネティズム」が放射されていたのだと述べています。これは漱石がいかに人を惹き付ける存在であつたかを物語っていると言えるでしょう。

この木曜会に参加した面々はいずれも漱石を師として尊敬していましたが、普段の漱石は弟子たちに対して居丈高に振る舞うようなことはずせず、お互いに率直な意見を述べ、時には冗談をも言い合う関係でした。また、漱石は、苦学する者にはその学資を工面してやったり、文筆家を志す者には朝日新聞社員として文章発表の機会を与えてやったりするなど、面倒見が良く、情の深い人物だったのでした。

そうして漱石の薫陶を受けた弟子たちは後にそれぞれの分野の第一人者として活躍しました。例えば、内田百閒や鈴木三重吉、森田草平らは小説を書き、松根東洋城、林原耕三らは俳句を作り、師と同じく文学者の道を進みました。また、漱石が熊本にいた頃の教え子寺田寅彦は物理学者として様々な研究を残していますし、和辻哲郎、阿部次郎、安倍能成などは日本の哲学界をリードする存在になって、学問の道で活躍しました。ユニークな存在としては岩波書店の創業者岩波茂雄のような実業家や津田青楓のような美術家もいました。それから、現在まで続く漱石の人気の陰に、漱石の娘婿となった松岡譲や漱石の死後、『漱石全集』の編集に心血を注いだ小宮豊隆らの尽力があつたことを忘れるわけにはいかないでしょう。

このように、漱石の弟子たちは漱石に学んだことを糧にして多種多様な分野で才能を発揮したのでした。

『牛になる事はどうしても必要です。吾々はとかく馬になりたがるが、牛には中々なり切れないです。(略) あせつては不可せん。頭を悪くしては不可せん。根氣づくでお出でなさい。世の中は根氣の前に頭を下げる事を知つてゐますが、火花の前には一瞬の記憶しか與へて呉れません。うんうん死ぬ迄押すのです。それ丈です。決して相手を拵らへてそれを押しちや不可せん。相手はいくらでも後から後からと出て來ます。さうして吾々を惱ませます。牛は超然として押して行くのです。何を押すかと聞いたら申します。人間を押すのです。文士を押すのではありません。是から湯に入ります』

大正5年8月24日 夏目金之助

漱石が亡くなる3カ月前、芥川龍之介(当時24歳)と久米正雄(同24歳)に送った手紙から抜粋。「漱石全集第15巻」(岩波書店)



ともに創ろう、(仮称)「漱石山房」記念館

漱石を発信する活気とにぎわいのある記念館に
漱石文学とともに、ゆったりと時を過ごせる記念館に

- 記念館内に書斎・客間・ベランダ式回廊など「漱石山房」の一部を再現
- 常設展のほか、企画展や講座・イベントを開催し、漱石やその文学の世界を紹介
- 漱石に関する本を読みながら、ゆったりとした時を過ごせる図書室やカフェを設置

整備予定地 新宿区早稲田南町7番地

- 諸室概要
- 2階……展示室(企画展示、常設展示)
 - 1階……山房再現展示、導入展示、ブックカフェ、ミュージアムショップ
 - 地下1階……図書閲覧室、講座室、事務室、収蔵庫



建築設計：フォルムデザイン一栄株式会社

(今後のスケジュール) 平成27年度(2015) 建築工事着工
平成28年度(2016) 29年2月 記念館開館

夏目漱石記念施設整備基金に
ご支援・ご協力をお願いします

漱石ゆかりの新宿のまちに、初の本格的な漱石記念館を整備するため、区民の皆さんをはじめ、多くの方にお力添えをいただきたいと考え、昨年7月に「夏目漱石記念施設整備基金」を設置しました。目標額を2億円として寄付の募集を開始し、平成26年11月21日現在で5,139万8,000円(901件)のご寄付をいただいています。ご厚志をお寄せいただいた皆さんに心より御礼申し上げます。皆さんからの寄付は、記念館の建設と資料の収集に活用します。引き続き、皆さまの温かいご支援・ご協力をお願いいたします。

問い合わせ先

新宿区地域文化部 文化観光課 文化資源係

〒160-8484 新宿区歌舞伎町1-4-1 電話 03(5273)4126 (直通)